

Title	接尾語・形式名詞・辞
Author(s)	原田, 芳起
Citation	語文. 11 P.1-P.8
Issue Date	1954-03-20
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/68443
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

接尾語・形式名詞・辞

原 田 芳 起

接尾語の性格に関して、時枝学説の与えた説明は、さまざまの方向に新しい問題を提供するものであると思ふ。

国語の接尾語は印欧語のそれと同様には、語の構成要素として考へることが出来ない。云云。(国語学原篇三〇六頁)

「何か事ありげ」右の「げ」は「ありげ」といふ一語の内部的要素ではなくして、次の如く分析されなければならない。

何か事あり・げ

「げ」は「あり」に直に結合するのではなく、「事」「あり」が結合したものの全体に更に結合するのである。更にいへば、「事あり」は「何か」を包摂してゐるのであるから、「げ」は實際は、「何か事あり」全体をそこに包摂し、結合してゐると考へなければならぬのである。これは入子型構造形式の持つ特質であつて、「げ」は、「何か事ある・様」の様と同様に上接の語全体と関係するのである。若し「げ」が語の内部的要素であるならば、右の様な意味的聯関は生じない訳である。

(国語学原論三〇六頁)

国語の接尾語は、機能上、単語内部の要素と考へるよりも、

一語として取扱ふ方が適切である。(日本文法口語篇一五二頁)

国語の接尾語をもし定義するならば、比較的独立性が少く他の語と合して一語を構成することの出来る語とも云はなければならぬ。一語を構成することが出来ると云ふ点で、いはゆる形式名詞のやうなものと区別することが出来る。(日本文法口語篇一五五頁)

右の摘要に示される様に、接尾語は、語の内部要素ではなくて、一語として機能をもつ独立性のあるものであり、もちろん詞に属する。

この点について、疑問になる点がないことはない。なるべく時枝学説の線に添うて、私の疑問になる点を記してみたい。

第一に接尾語という用語と、それが指す言語上の事実との連関しかたである。

あなたにはめられたさにそんなことをするのです。

厚さ五寸の板。

この二つの「さ」を同一語として取扱つたがよいかという問題がある。前者を時枝学説に従つて解釈すれば、「あなたにはめら

れたさ」という一語を認める必要がある。一語的に統合されている事は事実であるが、一語であることと、一語的に統合されている事とは、やはり区別する必要があるように思う。後者はあきらかに一語で名詞である。後者を一語と感ぜしめるのは、その結合根たる「厚」と「さ」との結合が過去に行われていて、現代語としては、結合としてでなく一語として与えられているという点にある。国語史的には、かつては前者のように、入子型構造形式を作る機能を有した語が、後代にそれを消失させて、後者のような形だけになったものもある。「赤み」「すごみ」などは、
風をいた・み

村肝乃心乎痛・見(万葉卷一)

のように入子型構造形式を作ったが、現代語には存在しない。接尾語「ごと」についても、現代語では、「見事」「仕事」「きれいな事」など一語化した例だけ存するが、室町時代には、

秦ノ民トナリ・ゴトハイヤヂヤ(蒙求抄卷六二九丁ウ)

人カラヨイコトヲシタトシレ・事ハイヤ(同卷八、一二丁ウ)

陳君カラソシラレ・コトハイヤジャト云ソ(同卷九、五丁ウ)

是ホトマコトナル将ヲセメ殺シ・コトハ惜イ(同卷九、八丁ウ)

実録ハ其ノ上ノアリ・コトヲカクモノヂヤ(同卷九、五〇丁ウ)

の様な句の統合要素をなしている例が豊富に見出だされる。

右の語法は狂言記その他の口語資料には見られず、専らのように抄物の言語に見出されるのであるので、多少方言的な性質が進出して来たものかと思われる。現代の熊本方言には、あきらかに右の抄物に見られる語法が、一つの文法をなして存在している。

それらについては拙著熊本方言の研究一八九頁以下に説いたのであるが、

泣キ・ゴツ(ゴト)ガイルカ

イラン世話ノシ・ゴツタイ

などの場合、「ゴツ」(Gotsu)は、語の内部的要素と見なすことのできないものである。

熊本方言に就いていえば、一方に「シゴト」(仕事)「ミゴト」(見事)の類の語彙は存在しているので、方言的体系の中では前の「ゴト」とは別語と見たが正しいようである。「仕事」「見事」「泣き言」の類は固定して一語をなしているが、

イイ・ゴツガバカラシカ

勉強ナシカ、シ・ゴツガイルカ

の方では、たとい上の語が単一の動詞でも、あきらかに語法上の現象で、「イイ・ゴツ」は「言う・事」であり、しかも、「言う」は陳述をなしているものであり、陳述をうけて体言化する文法上の機能を果している。「仕事」「見事」もかつてはその過程を通じているのであるが、それは国語史の上に位置づけられるもので既に文法的分割を容れないものである点で区別される。

接尾語が附いて、一語を構成していると思えず限り、やはり接尾語は単語の内部的要素と見なければならぬ。接尾語を一語と見なせば、それと対立する結合根も一語とみなければならぬ。「げ」に結合する「何か事あり」を一語と見なければならぬ。「さ」に結合する「あなたにはめられた」を一語に見なければならぬ。

従来接尾語と見られた語彙の中に、明らかに一語としての独立性を失って、単語の内部的要素と化したものと、まだ一語的な独立性を保って、句の陳述を受けて一体的（一語的）に結合するものとの二種類が含まれていることは、否定できない事実である。

後者は、形式的統括機能を有するものと見ることができ、この統括機能は、時枝学説における、辞が有する総括機能とも、その統括総括する点に於て、一脈相通するものである。

いとやんごとなききはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり

右の例で、「が」は格助詞であるから、上接の句を一語化して、一体言と同じ資格の語として承けているのである。ただ異なった次元において総括している点で、辞となされる。右の文を口語訳してみると、「の」という形式名詞がこの句を総括した上で、「が」に承けられる。

これによって考えると、「が」は、むしろ統合されたものを承けているので、「が」によって総括されるのではないとも云える。上代国語では、句を詞として統合すべき形式名詞が表現されないで、省略の形になっているのが普通であったと考えることができる。

時枝学説では、総括機能は辞に属するものとして説かれるものであるが、詞にも形式的統括機能を有する詞を考へることができるとすれば、それが時枝学説における形式名詞であると思われる。かくて、接尾語と形式名詞とは、明瞭な一線を引くことができると説かれていられるにも拘わらず、接尾語と説かれるものの中に、

形式名詞との間に、本質的に共通したものがあって、形態以外に区別の原理を見出だせないものがあることが考えられて来る。

二

時枝学説では、接尾語と形式名詞との区別を、「一語を構成することが出来る」と云ふ点に見出だされた（前出）のであるが、「人カライイ事ヲシタト知レゴト」を一語と見るとは、自然でなく、一語的に統合されていると見るべきであるとすれば、「いとやんごとなききはにはあらぬ」も省略された形式名詞に統合されて体言化されている点では、本質的な区別を見出だすことは困難である。両者の区別は、いわゆる連体形からすると、連用形からするとの差である。

この連体形と連用形とは、いずれも代表的機能によって附した便宜上の名称で、両者とも動詞の名詞法を構成する機能を有するものであったことは国語史上明瞭であり、現在でも方言文法においては顕著に現われている場合が少くない。形容詞では連体形と語幹形が体言に連なる形になっている。連体形から連なっても一語化したものがあつたことは、

行く春、高子、あきらけい子、立つ瀬、あくる年、ありし日など、その例に乏しくはないので、連体形からすると、連用形からするので、それ程本質的な差を見ることはできない。

両者同じ様に、句を承けて、これを詞として統合し、入子型構造形式を作るのであるが、連用形からするそれは、比較的結合が強く、一体化の傾向が著しいということが云える。

かくて、従来接尾語と見られ、時枝学説でも接尾語として処理された語類を、分別して、単語の内部的要素と化したものを接尾語と名づけ、接尾語の分析抽出は、はっきり歴史の考察の立場でなされるものと局限し、史的な意味論の対象とし、句の統合して詞として一体化する文法機能の存するものは、名詞的性質のものは、形式名詞に属せしめ、用言的性質のものは形式用言として、再検討すべきではないかと思われて来るのである。時枝学説の用言的接尾語の例（日本文法口語篇一五八頁以下）でも、

がたい、めく、たがる、らしい

などは現代の口語法においても、単語の構成要素として片づけにくいものである。

御意に応じ・がたい。

今を時・めく

うまい物を食い・たがる

本校の生徒・らしい行動をせよ。

「赤い」「大人しい」「おこす」「きはだつ」の類は語史的分析によつて、その一語内における構成要素として抽出されるのであつて、句を総括するようなことは無い。

それらもかつては文法的な総括機能をもっていた時代もあるものであつて、形容詞語尾の「く」が、もと形式名詞であつたことも語史的に実証されている。

吾背子乎何処行目跡。竹之背向爾。宿之久。今思悔。幾（万葉卷七）
この権の場合、「久」は明らかに、「吾背子」を何処行かめと辞竹のそがひにねし」を一体化して、その連体形から承けた形式名詞で、

かゝる一体化（名詞化）の文法形式化であり、「く」の概念内容は失われている。

三

接尾語と形式名詞乃至形式用言の区別を右の如く考えたのであるが、「われり」「かれり」の「ら」は一語の内部的要素と認められ、詞に属するものであるから、接尾語と見なすべきであるが、平安朝の文獻による次の如き例、

あまのはばや、ゆぎらをつかはしてみせたまふに。（日本紀
意宴和歌卷上）

なかとみ、いむべのかみら（全）

の「ら」は、その承ける語が二個以上の連接をなして居り、単語の内部構成要素と見られないものであるから、この時代の言語体系の中では、接尾語とは見ないで、詞としての形式名詞と見なすことになる。また、

みことひてのたまはく（全巻下）

みこまたとふたまはく（全）

の「く」も、後世の

いはくがある。

恐らくは誤であらう。

などとは区別されて、「く」自身の単語としての語性は、形式名詞と見なすべきものであらう。本来格表現のなかつたものが、文脈の中で、連用修飾句格に類したものとなっているのである。発生物には、むしろ

みことひたまはくは、云云。

という、はで連結されたものとひとしく、AはBの形式で、AとBとが同一であり、Aの内容を詳言したものがBであるという、主述的形式をなしている。

みこまたとふたまはく、いかなればぞと。

太子こたへたまはく、云云とのたまへり。

あたかも、題目と内容との関係である。「く」の形式名詞としての語性がまだ生きていたものとして解釈されるべきであろう。

人生ノ間ニ年ノ老イヤスイコトハ、ココロニ思イゴトノ多キニヨッタコトゾ。(中華若本詩抄卷中五丁表)

連用形を承ける「ゴト」は前頃に説いたが、蒙求抄、古文真室抄、中華若木詩抄等にはかなり多く出ているもので、室町時代の或る層位の言語では、文法的な通則を成立させていたものと見なされる。必ずしも独点を附しているとは限らないが、独点を附したものが多く、それにこの系統の文法現象を保有する熊本方言の例から逆に推定すれば、すべての濁音化していたものと思われる。右の一文の中で、連体形を承けた「コト」が二つ用いられているから、語史的に同じ形式体言であるが、濁らない「コト」は連体形の句を承けて入子型構造形式を作り、その形態は分析的であるに對し、濁る「ゴト」は連用形において承けて、入子型構造形式を作る点は全じだが、その形態は非分析的である。右の例で、注意したいのは、「心ニ」は、述語「多キ」に對する連用修飾語ではなくて、

心ニ思イゴトノ多キ

であつて、これを分析的形式に直せば、

心ニ思フ事ノ多キ

となるのであり、この分析的形式が、前者を駆逐してしまつた歴史が推定される。

この「ゴト」の現代熊本方言における文法形式は前に説いたが、「ゴト」以外でも、「ガト」がほとんどの同様の構造に用いられる。

遠慮バ、シガツガイルカ。

心配シガツワ、ナカッタ。

一所懸命ニナリガツモナカ。

「ガツ」の部分の意味は、何々するだけのねうちの意であるから、恐らく語史的な分析では、連用形、プラス格助詞「が」、プラス形式名詞「ト」(ツ)であろう。時々連用形に転じて

遠慮スルガツモナカ

と云つた形もあらわれる。この点からしても、接尾語と形式名詞を、時枝学説の如くに分別する事が言語事実^{註3}に合わなくなるのである。

心配スルホドモナイ

心配シガツモナカ

心配スルコトモナイ

心配シゴツガイルカ

根本的に語性を異にするものとは見られないようである。

四

詞辭の間にはお互に轉換が認められるのであるが、時枝学説で

例示された体言的接尾語の例。

人を訪ねがてら京都へ行きました。

本を読みながら歩く。

などは、接続助詞ないし副助詞との分別にはやはり苦しまざるをえない。もちろん、がてらは「その序に」と置き換えることもできそうであるし、ながらも「と同時に」とでもおきかえてみると、客体的世界に属すると考えることはできさうだが、がてらは語史的にも接続詞が根とする語であり、右の文においても、「人を訪ね」「京都に行きました」の二つの句を接続する機能を示していると思う。ながらの方も接続助詞つつと同じ機能であり、文語口語で対応していると見られる。

がてらは云うまでもなく「人を訪ね」を総括して居り、訪ねだけに附くものではない。ながらの方も

本を読みながら

と総括している。このあたりで、詞と辞との分別に問題が生じて来るのではないであろうか。時枝学説で、辞に属するとされた総括機能は、詞に属せしめられる形式名詞乃至形式用言にもそれに類した形式的統合機能が認められることは前に述べた。主体表現か、客体表現かでこれを分別しようとするのが、辞と接尾語乃至形式名詞等との分別の原則であるが、右の如き例では少からず迷わされる。

また、「尖った」「曲った」の類を連体詞とされ、「た」は接尾語とされる(日本文法口語篇一五七頁)のであるが、

先の尖ったナイフ

クナ／＼に曲った 針金

の如き例でも、同様に解すべきであろうが、「た」が接尾語として句を一語化していると認めるには、まだ何か無理があるように思われる。

前に些かふれたように、体言に結合する根はやはり体言的なものであったらしいことは、用言が結合根となる時、連用形または連体形、また形容詞の語幹形をとることで推知されるのであるが、きれいに咲いた花

私の少しも知らなかった話

の傍線の部も、句として体言的な性質を与えられて、下の体言に続くと考えられるが、それはこの句が入子型の入子の中に入っているのである。^{註4}

美しい花

未知の話

と同じ型に導かれていると思われるのである。

折知りがほ

の「折知り」が名詞法をなしていると同じく、

見たさは見たし

の「見た」も名詞化されている。連用形、乃至連体形、乃至形容詞的活用の語幹形の機能である。^{註5}

切符の切らない方はありませんか。

の例について、ないが接尾語化されて、「切らない」という形容詞となつているので、「未購入」という事実の表現となつていると説かれている。

「切符を切らない」 ないは否定辞である。

「切符の切らない」 「ない」は「切ら」と合して形容詞を構成する接尾語となる。

かくて、右の「切符の切らない」は、「切符の赤い」「顔の白い」という様な表現の同形式であると説かれてゐる。(国語学原論二九二頁)

「切らない」全体が一時的に詞の資格を保有するのは、その通りであるが、それは「ない」が変性したのではなくて、句が詞的に統合されて、文脈の中で格づけられて連体修飾句格となつたのである。

「ない」が「切符の切ら」を総括したと考えられないと説かれてゐるが、この文は変格的なもので、その生じた素因は類推による混合である。問題は下を承ける形式名詞「かた」の統合に必ずやための句の変容、

本を読む

本の読み・かた

呉王云ワル

呉王ノ云ワレ ゴトニハ (中華若木詩抄卷上一七丁裏)

其ノ人ノ上ニアル

其ノ人ノ上ノアリゴトヲカクモノヂヤゾ。(蒙求抄卷九、五〇丁裏)

五、五〇丁裏

イラヌ心配ラスル

イラン心配ノシ・ゴツ (熊本方言) 註。

「切符の切らない方」は「切符を切らない方」とは意味がちがう。切るのは乗客ではない。「切符の切つてない方」の方がおだやかであるが、「切符の切つてない」にしてもそれが特に合理的な構成であると云う事もない。「切符の切らない方」が普通の文形式の習慣に背くというにすぎないので、「切らない切符の方」「車掌がまだ切符を切らない切符を持った方」を手とり早く言つた時に、前記のような形式名詞に連結するための「を↓」の置換を行つてしまつたのである。「知らない」を一語化してゐると説く事の当否は別として、それが右の変格発生の素因を説くものとは必ずしもならないように思う。(二八、一、一七)

註1、格助詞には本来は所謂総括機能はなかつたと見た方が適當ではあるまいか。

すくれて時めき給ふ ありけり

の場合、傍線部は形式名詞が表現されていないが、一体的に統合されて、体言性を与えられている。かゝる統合は必ずしも形式名詞を要せず、用言の連体形が本来、句を体言的に統合する機能を有してゐたと考えることもできる。連用形にもこの統合機能があつたのである。連体形の下に来る体言の省略と考へる必要はなく、かゝる統合機能の言語形式化として、形式名詞が発達したのである。

註2、形式名詞は句の陳述を承けてこれを一体化し、体言化する。形式名詞の中には、句を体言的に言いすえた形、即ち動詞や助動詞の連用形、形容詞の語幹形で言いすえた形に接続して、一体化するものがあると考えるべきであるが、それは形式名

節の中の別類と見るを妨げない。形式用言は体言または句を体言に言いすえた形に接続して、一体化し、用言化する。

今を時めく

は、「今は時なり」「今は時ぞ」の如き又を名詞で止めた形「今を時」に、形式用言「めく」が接続したわけである。「今を時」では独立し得ない形だが、結合の根幹とはなり得るので、

今を盛りと

こゝをせんとと

の様な形からも承認することができる。

註3、連体形接続、連用形接続の差は形態論的差別である。表現機能から品詞を認定しようとする立場からは、まず表現機能の上から観察した上で、形態上の差がいかなる表現機能に対応するかを考定すべきである。

註4、「きれいに咲いた」が、詞に転じているとすれば、句がその陳述と共に一体化したもの見なすべきであろう。「た」が辞から詞に転換したと考えることは、混辞を来す考えかたではあるまいか。

いとやんごとなききははあらぬが

の場合と同じではないか。右の傍線の句は、後世の様に、形式名詞「の」などを介して、「／＼のが」の形に統合総括されていないが、やはり無記号の形で詞として統合されている。

いとやんごとなききは

には一めらぬ

が

「が」が接続助詞として解釈されずに、格助詞として解釈される限り、「が」は上の句を詞性のものとして受けていることとは否定できない。それでは「にはあらぬ」の「ぬ」か「あらぬ」が詞に転換していると思われることが適當かどうか。「先の尖ったナイフ」の例もこれと異なることはないと考えられる。

註5、同時に句の詞としての統合という形式的機能である。
註6、「イラヌ心配ノシゴツ」は、感動文形式で、独立格を以て文を成す。下に「タイ」「クサイ」などを累加することもできる。

— 権薩女子大学教授 —

追記、

本稿を成して後に三上章氏の現代語法序説が公にされた。示唆を受けるべき御説が多い。準詞を立てる説など、たしかに問題にふれているが、なお考えてみたい。

(二九、二、二四)